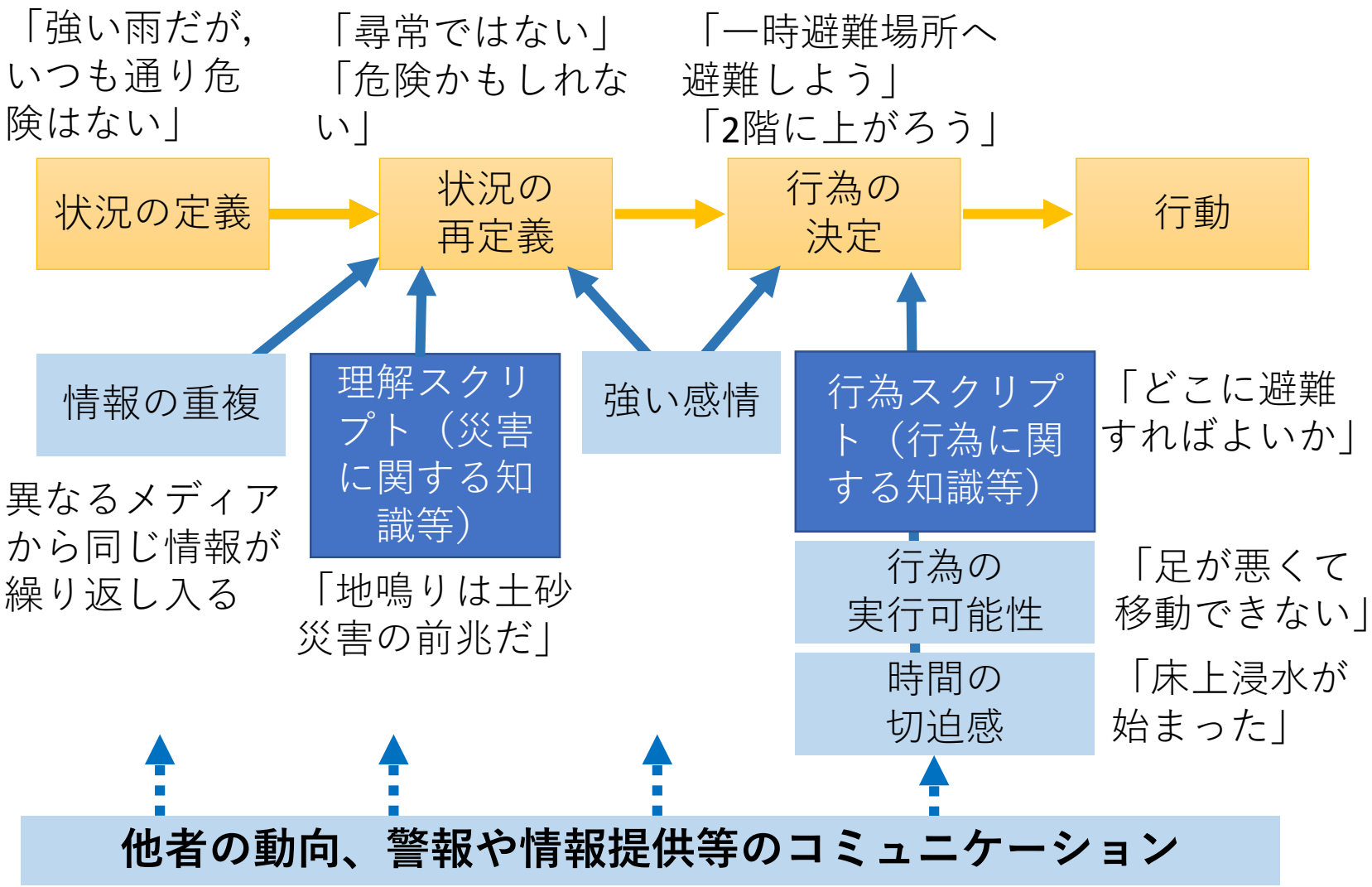
平成30年7月豪雨災害
避難行動調査の分析結果から

坂田桐子（広島大学大学院総合科学研究科）

緊急時の意思決定モデル（池田, 1986）



出典：池田謙一(1986) 緊急時の情報処理，東京大学出版会，p.163 図11-3を基に作図

状況の再定義を左右するもの

- 警報や避難情報をテレビやメール等で知っただけで危機感を感じる人は多くない
- 多くの人が自分で周囲の環境の変化を観察することで危機感を高めている

→ただし、このルートでは危機感を持った時にはもう遅く、逃げることもできなくなっているケースも

「状況の再定義」のタイミングが遅い

立ち退き避難を迷わせるもの

1. 状況の再定義はできているが、近隣の誰も逃げていないし、誰も避難を呼びかけに来ない

→状況の再定義だけでは立ち退き避難の決断には結びつきにくい？

→高齢などの理由により、暗い中、一人で避難場所へ移動するのに不安を覚える人が多数**（実行可能性）**

2. 「避難場所」への懸念

→何を持っていくべきか、クーラーは利くのか等、諸々の懸念**（行為に関する知識）**

3. 自身の責任

→自力避難困難者やペットがいて避難できない**（実行可能性）**や「家を守る」意識など

「他者」の重要性

1．状況判断への影響

近隣の人が逃げているかいないかを見て、「逃げなければならない危険な状況か」を判断する。あるいは，近隣の人と状況を見ながら相談しているうちに逃げた方がいいという話になる

2．他者への責任や人間関係の考慮

近隣の人や自主防災の人が熱心に避難を勧めてくれたから断ると悪いと考える。「他者を連れて逃げる責任」があれば，早い避難行動に結びつく

3．避難の実行可能性を高める機能

消防団やレスキューが避難を援助してくれれば避難する
子どもが車で避難を呼びかけに来てくれる

「自分の行動が他者にどのような影響を及ぼすのか」を知ってほしい

避難場所に関する知識や情報

１．避難場所のことを知らない

指定避難場所への道中が危険と思われる場所にある

避難場所での滞在がどのようなものか想像できない

避難場所に何を持って行けばいいかわからない（どのような備品があるかを知らない）

知らないことから来る懸念や不安

２．避難場所に関する発災当日の情報不足

避難所が開設されたかどうかわからない

指定避難場所が一杯で入れない（車を駐車できない）

避難場所までの道が通行できる状態なのか不安

「指定避難場所と避難経路を知る」だけでは不十分？

豪雨災害のリアリティ

- 土砂災害や浸水被害のイメージができていない
- 複合型豪雨災害がどのようなものかという知識がない

どの程度のスピードで水位が上がるか

土石流の強さ

道路のどこが冠水するか

家の前に土石流が来た時点で，既に避難するための道は通行不能になっていることが多い

・・・等々

複合型豪雨災害の性質を知る必要がある